



女性が働くこと

165

わたしの聖戦

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

彼が帰ってきた

「彼が帰ってきた」は、

魅せられた。

日本では「帰ってきたヒトラー」の邦題で紹介されたドイツの読み物である。世界中でベストセラーになった後の2014年に日本で発売され、瞬く間に話題となり増刷を重ねた。すでにその頃には映画化も決定されていたが、日本での公開は久しく未定のままだった。あきらめ気分であったところ、この夏めでたく全国での公開が決まり、自称ヒトラー研究家を気取る私は、早速公開日に映画館に足を運んだ。

ストーリーは単純だ。1945年に死んだはずのヒトラーが突然現代に蘇るというもので、最初は本人も自覚がないのだが、周囲の様子やキオスクで発売されている新聞等の情報から、どうやら自分が70年の時代を経てタイムスリップしたらしいことに気づく。周囲は、てっきり物まね芸人だと思ひ込むのだが、彼の巧みな情報収集や演説に惹きつけられ、あつという間にドイツの人気者にのしあがっていく。

ヒトラーといえば悪の象徴であり、ドイツでは彼の著書「わが闘争」は発刊禁止である。少し前にはドイツでヒトラーの名を口にするのもタブーであった。そのような時代を経て、今回封印していた過去を實に見事にコメディ化した手腕には唖るばかりである。原作者はドイツ生まれのティムール・ヴェルメシュ。今年47歳になる若手作家であるが、監督はさらに若く38歳、やはりドイツ出身である。

ふたりに共通の思いは、ヒトラーをただタブーとしてとらえるだけではかえって事実を隠してしまふ、彼の悪魔性が当時の大衆にとっては賢く魅力的だったからこそあのホロコーストが生まれたのだと主張する点。目を逸らさずに、彼の礼儀正し



くチャーミングなリアル性も描くべきだ、と。それはまさに映画を観るとよく理解できる。圧巻は、ヒトラーが制服姿のままドイツを行脚し、人々の反応を隠さずカメラに収めた映像だ。多くの人がその姿にまずは驚くが、スマホでツーショットを撮ったり、ハグを求めたり、若い女子たちが印象的。もちろん、中には罵声を浴びせ、憎しみを露わにする人もあった。皆、本物ではないと知りながら、あたかも本人に向けた正直な気持ちを吐露していた。